瀬木学園所在地の春敲町と熱田神宮の東御門春敲門との関係

The relation of Shunko-cho, the seat of Segi-Gakuen to Shunko-mon, the former East Gate of Atsuta Shrine

野村　隆英

愛知みずほ大学大学院

Takahide NOMURA
Graduate School of Human Sciences,　Aichi Mizuho College

Abstract.

Segi-Gakuen is seated at Shunko-cho, Mizuho-ku of Nagoya.　The name of Shunko-cho is derived from Shunko-mon, the former East Gate of Atsuta Shrine, since the area had the command of the gate when the name of the town was settled in 1931.　It has been documented that Shunko-mon was founded in 686, the era of Emperor Tenmu.　Unfortunatelly the gate was burned down by the aerial attack in 1945 during the World War II.　The Japanese letter of Shunko-mon, when it is written in Chinese letter Kanji, means that the gate is gently knocked by Spring when it reaches the gate from the east.　Knowing the story and the history of Shunko-mon provides us the deep understanding of Shunko-cho where Segi-Gakuen is located.

キーワード：春敲町; 春敲門; 熱田神宮.
Key Word：Shunko-cho; Shunko-mon; Atsuta Shrine.

１．はじめに

瀬木学園の歴史は 1940 年（昭和 15 年）に瑞穂高等女学校（現愛知みずほ大学瑞穂高等学校）を当時の昭和区春敲町（現瑞穂区春敲町）に開校したのに始まる[1)]。学校の用地は創設者瀬木家が所有していた土地の南側の道路が拡張されることになり（現在の豊岡通）、それによって校地が熱田神宮方面と接続されること、そして、市電・市バスの交通の便も良いことから春敲町に決定された[2)]。

本稿では、現在、愛知みずほ大学、同大学院、愛知みずほ短期大学、愛知みずほ大学瑞穂高等学校といった瀬木学園のメインキャンパスが所在する春敲町（図 1）の町名成立の経緯と、この町名の熱田神宮春敲門との関係性に関する資料を収集し、まとめることを目的にした。

２．春敲町の成立と町名の由来

春敲町が成立したのは 1931 年（昭和 6 年）2 月 1 日であり、当初は南区の町として成立した[3)]。南区の熱田東町字牛巻および瑞穂町字牛巻・新池下・枯木・南蛇塚・中野・寺山・中ノ口の各一部が合わさって、南区春敲町 1～4 丁目として成立したのである。南区春敲町は 1937 年（昭和 12 年）10 月 1 日に昭和区が誕生したのに伴い、昭和区春敲町となった。さらに 1944 年（昭和 19 年）2 月 11 日に瑞穂区が新たに誕生すると、春敲町は昭和区から瑞穂区の行政区に含まれることとなった[4)]。瑞穂区という区名は、1944 年に昭和区から瑞穂区に変更となった地域のうちの広い部分が瑞穂町（旧瑞穂村）という名称であったことに由来する[4)]。

春敲町という町名の由来は、熱田神宮の東御門である春敲門（しゅんこうもん）がこの地域から望見されたことに因んだものであるという[3)]。今日では、愛知みずほ大学が所在する春敲町からは多くの建物、高速

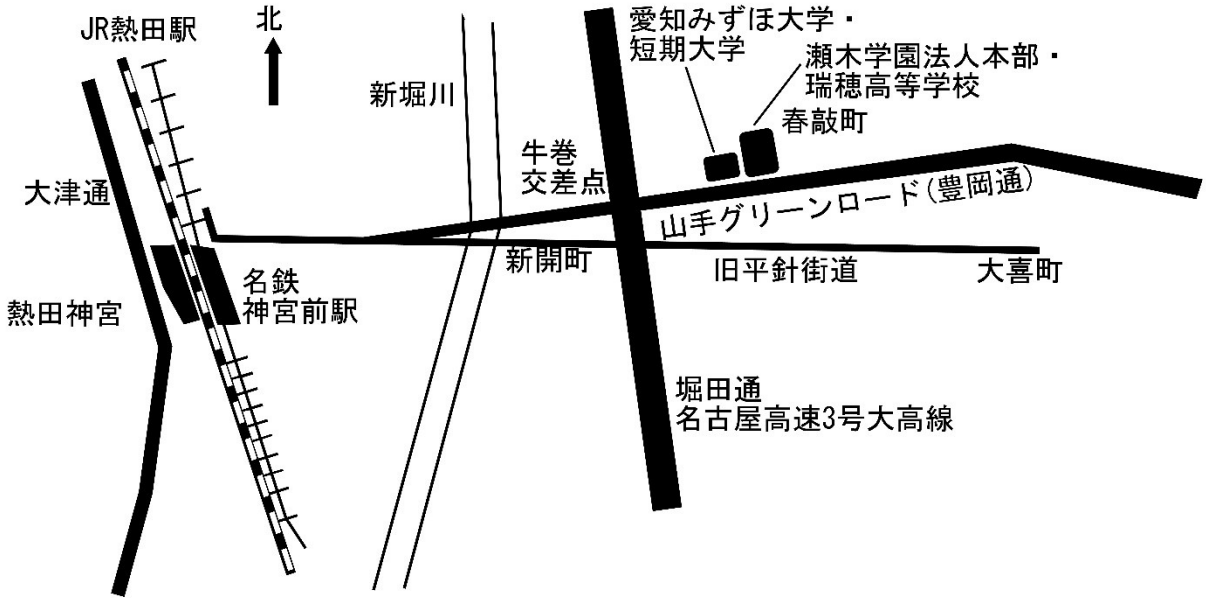

図 1.　瀬木学園メインキャンパスが所在する春敲町と熱田神宮との位置関係を示す概略図

道路などが障害となって熱田神宮を見ることは出来ない。愛知みずほ大学の学舎の四階屋上テラスに上がってみても、視界はたくさんのビルに遮られて、熱田の杜を見出すことはできない。牛巻交差点から西方を眺めると、先にある名鉄名古屋本線の神宮前駅ビルが障害になり、やはり、熱田神宮まで見通すことはできない。春敲町からは少し離れるが、牛巻交差点から堀田通の西側歩道を南方向に三十メートルほど行くと、旧平針街道に出会う。この道は堀田通東側の大喜町方面から堀田通西側の新開町を通り抜けて真っすぐ熱田神宮に向かっている。この道の西方向の先には、今日でも確かに熱田神宮の木立が見える。

３．　春敲門について

古来、熱田神宮は南を正面とし、南面に海上門（かいじょうもん）（海蔵門）、西面に鎮皇門（ちんこうもん）、そして東面に春敲門が置かれていた[5, 6]。残念ながら、春敲門と鎮皇門は、1945 年（昭和 20 年）3 月 12 日に、そして、海上門は同年 5 月 17 日に、第二次世界大戦での空襲で焼失している[7]。鎮皇門と海上門は国宝であった。

春敲門は、日本が律令国家への道を歩み始めていた天武天皇、朱鳥元年（686 年）の創建とされ、その後、江戸時代の貞享年間に改修されている[5]。春敲門創建の時期についてはその公的な記録が無く、実は明らかでない。熱田神宮略記などにある「朱鳥元年の創建」は、「そのように伝わっている」という趣旨である。第二次世界大戦の空襲で春敲門は焼け落ちたが、門に掲げられていた扁額（鎌倉時代）は幸いにも焼失を免れて、現在は熱田神宮文化殿に所蔵されている（愛知県指定文化財）。扁額にある「春敲門」の文字は小野道風の筆と伝えられている[8, 9]。

熱田神宮の東御門に「春敲門」という名前がつけられたのは、「春は東から来て門を敲く（たたく）」という言葉による。春敲門は熱田神宮への勅使が入る門であった。その門を敲くときの音が、春が来て門を敲く心地であったという[9]。国語学者の金田一春彦博士著の「言葉の歳時記」にも熱田神宮の春敲門について「古来、春は東から吹くこの柔らかな風に乗って訪れると考えていた。名古屋の熱田神宮の東門を「春敲門」というのは、春が来てたたくという意味だ。だからこのことばは、春浅いころ、それを待ちわびる心をのせたことばといってもよい。」と記している[10]。又、熱田神宮には楊貴妃にまつわる伝説がある。安禄山の乱で楊貴妃を失った玄宗が、道士を派遣して彼女の行方を探させたが、道士が蓬莱の地である熱田を訪れその戸を敲いた。それが春の頃であったので春敲門の名がついたとの逸話がある[11, 12]。

春敲門はこれまでに大正 13 年 12 月と昭和 13 年 7 月の二回移築されたことがわかっている[5]（図 2）。大正 13 年以前の春敲門（図 3）の位置は、熱田神宮会館の北館ロビーの前庭に立つ石碑（図 4）によって標されている。春敲門は大正 13 年 7 月、このころ始まった熱田神宮境域拡大事業（大正 10 年～昭和 2 年）[13]に伴い、約 164 メートル南に移築された（図 5）。そしてその後、昭和13年にはそこからさらに約36メートル南、現在の神宮東門の鳥居の約 40 メートル西に立つ一対の燈籠のあたりに移築された（図 6）。

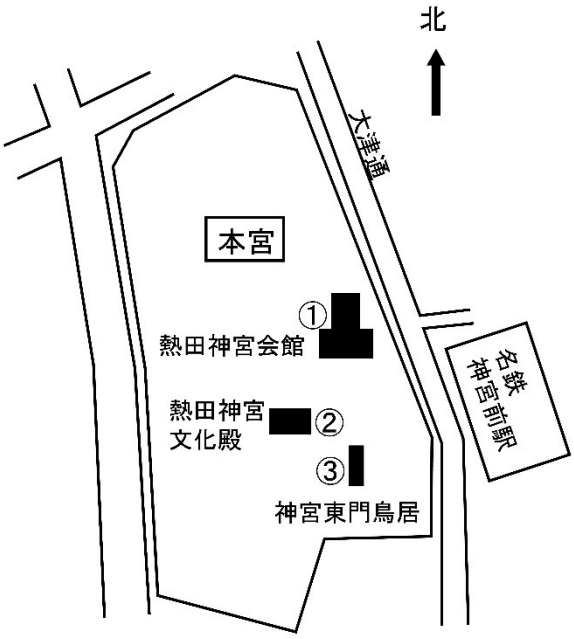

図 2.　春敲門の位置の変遷
①：大正 13 年以前の春敲門の位置。現在、ここには熱田神宮会館が建っており、同会館北館ロビーの前庭に春敲門址の石碑がある。
②：春敲門が大正 13 年 12 月に移築された場所。現在の熱田神宮文化殿の東側にあたる場所。
③：春敲門が昭和 13 年 7 月に移築された場所。第二次世界大戦時の空襲にて焼失した。

図 3.　大正 13 年以前の春敲門の写真「熱田神宮絵葉書（熱田神宮所蔵）」より許可を得て引用。

図 4.　春敲門址の石碑
熱田神宮会館北館ロビーの前庭に建つ（著者撮影）。

図 5.　大正 13 年に移築された春敲門の写真
「熱田神宮　境域拡張整理記念　昭和二年発行」より引用

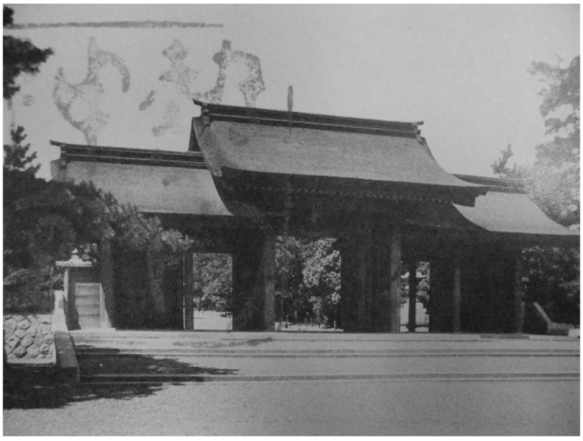

図 6.　昭和 13 年に移築された春敲門の写真
「熱田神宮絵葉書（熱田神宮所蔵）」より許可を得て引用。

４．熱田神宮春敲門と天武天皇の繋がり

熱田神宮は伊勢神宮に次ぐ由緒貴い大社として、古来皇室をはじめ朝野の尊崇が大変に厚かった[14]。熱田神宮は三種の神器の一つの草薙剣(くさなぎのつるぎ)をご神体として祀っている[15]。この熱田神宮が大宮として充実してきたその礎は天武天皇の力なくしては築かれなかったと考えられる。672 年、天智天皇の死の翌年、大海人皇子（おおあまのおうじ）は兵をあげ、大友皇子（おおとものおうじ）を破った。壬申の乱である。大海人皇子は近江朝を倒し天武天皇となり、都を大和に移した。この壬申の乱の勝利、天武朝の成立には美濃の豪族たちと尾張氏[16]が非常に大きな貢献をしたことが知られている[17]。この尾張氏と日本武尊に関係する人々が祀られる熱田神宮に対しては天武天皇も自ずと強い思い入れがあったものと理解できる。

天武天皇が天皇としての地位を築きつつあった時代の一時期、熱田神宮の御神体である草薙剣は熱田神宮から持ち出され、朝廷に祀られていた[18]。晩年、天武天皇は自身が病を得た際に占いをさせたところ、その結果は、「天皇の病は、草薙剣が熱田神宮から持ち出されたままになっていて、返されていないことの祟りであろう」とのことであった。そこで、天武天皇は朱鳥元年（686 年)、病気平癒のために草薙剣を熱田神宮に返還した[18, 19]。春敲門、鎮皇門、海上門の創建がなされたのも天武天皇、朱鳥元年とされる[5]。天武天皇の熱田神宮に対する格別の尽力は、自身の病の平癒祈願や中央集権的国家の構築といった政の一環として行われたこともあろうが、やはり政権奪取の過程で築かれた尾張氏との強い絆が背景としてあるものと思われる。

５．考察

春敲町は瑞穂台地の西の端にある町である。山手グリーンロード（豊岡通）を大喜町バス停あたりから西へ向かうと、道はなだらかな下りである。瀬木学園法人本部、愛知みずほ大学瑞穂高校の前のあたりになると下りの勾配はなだらかになり、さらにその西の愛知みずほ大学・同短期大学の学舎の前ではほとんど勾配はなくなる。牛巻の交差点では南北に堀田通が伸び、さらにその西方には新堀川が南北に流れる。今から 180 年ほど前の江戸時代に作図された高田村や大喜村といった、現在の春敲町が含まれる地域の絵図[20]を見ると、村の西半分の精進川（現在の新堀川）寄りの一帯には水田、村の東半分の瑞穂台地側一帯には畑としての土地利用が見て取れる。精進川の向こう側は熱田神宮領で、熱田神宮までは主に田が続いていた。

瑞穂台地と熱田台地の間、現在の堀田通と新堀川に沿った南北に伸びる低地帯は、古墳時代以前までは海に続く干潟、もしくは入り江であり[21]、その後田畑として開墾された。瑞穂台地と熱田台地はこのような低地を挟んでいるわけで、現在の瑞穂台地側の春敲町からは熱田神宮の東面にある門、「春敲門」を肉眼で望見することが出来た。昭和初期頃までは、春敲町側から熱田神宮方面を望むと、右手には熱田駅、日本車両の会社建屋、そして左手には神宮前駅があり、その間の空間を通して、熱田神宮春敲門が望めたと考えられる。

瑞穂台地から望むことが出来た春敲門とは、春敲門址の石碑の場所に建っていた門か、あるいは大正 13 年に移築された門か、もしくは両方ということになるが、大正 13 年に移築された門が望めたことは確かであろう。大正 13 年の移築によって春敲門が見えなくなっていたとすれば、昭和 6 年に「春敲門を望めるから」という理由での春敲町の命名はなかったろうからである。

大学が、ある町に根ざせば、その町と大学とは強い絆で結ばれることになる。この稿では、瀬木学園が設置された春敲町の名前の由来は熱田神宮の春敲門にあることをいくつかの資料によって確かめることが出来た。また、春敲門の位置、名の由来、さらにその歴史についても知ることができた。春敲町に瀬木学園の校地が所在するという縁（えにし）に大きな喜びと感謝の念を感じる。

「瑞穂短期大学四十年史」の第 3 部「40 年の回想と展望」に、春敲町と学園との絆を想って書かれた箇所がある[22]。その個所をここに引用しておきたい。「『瑞穂の所在地名は』とよく尋ねられる。それは春敲町という文字がなじめないためであろう。電話でどう書くのですかと困らされたり、コウと読むのですかという話も聞く。『春敲町』とは熱田神宮に関係があり、本学の前の道路を西に向かいぶつかったところが神宮の森で、そこに神宮第一の門があり、春敲門という扁額が掲げられていた。春敲町とは春敲門の門前町として名付けられたのであろう。春敲門とは春が来たよと敲く門、ここを開いて春の光さす門、何とほのぼのしとした明るくうるわしい名前であろう。(中略) 春敲門といい、春敲町といい、文字はむつかしいがこんなさやかさのただよう名称である。春つげる門をくぐって全国にはばたく若人の晴れ姿を想うことしきりであるが、本学のイメージにつながらないであろうか。」

謝辞

この課題の調査研究にあたっては平成 30 年度学校法人瀬木学園教員教育研究費を受けてなされた。

春敲門の建っていた場所の変遷は複雑である。その歴史を知る上で、熱田神宮文化部部長の野村辰美氏、熱田神宮文化研究員・熱田神宮宝物館学芸員の飛岡秀樹氏に貴重な資料を拝見する機会やお話を伺う機会を

いただいたことは大変に意義深いことであった。ここに両氏に深甚なる感謝を申し上げます。

文献

1) 1939 年（昭和 14 年）に瀬木財団法人が瀬木本雄（もとお）医学博士・せき夫妻およびその長男瀬木本立（もとたつ）医学博士を中心とした医学者一族により設立され、1951 年（昭和 26 年）に学校法人瀬木学園となった（瑞穂高等学校五十年記念誌編集委員会編:瑞穂高等学校五十年　記念誌、p211－215、瑞穂高等学校、1990)。1940 年に開学した瑞穂高等女学校（現愛知みずほ大学瑞穂高等学校）の創立の趣旨として、瀬木本立瑞穂高等女学校校長は「才能を持ちながら学校に行けず一生を終わらなければならない多数の子女を見て、その国家的大損害を心配したのと、日本の学問、特に科学方面が非常に遅れていることを悲しく思い、他日日本の科学の発展する基礎をつくりたい」と述べている（瀬木学園開学期の教育理念、教育課程については次の論文が参考になる。梅本大介：1940－1943 における高等女学校の教育課程に関する事例研究―瑞穂高等女学校を事例にして―、神奈川大学　心理・教育研究論集、第 43 号、p5-19、2018)。1950 年（昭和 25 年）には家政学科を有する瑞穂短期大学（現愛知みずほ短期大学）が、瑞穂区となった春敲町（瑞穂区は 1944 年（昭和 19 年）に昭和区と熱田区の一部から成立した）に創設された。1993 年（平成 5 年）には愛知みずほ大学が創設され、2003 年（平成 15 年）には大学院が設置された。当初、大学と大学院は豊田市に置かれたが、2014 年（平成 26 年）に瑞穂区春敲町に移転した。
2) 瑞穂高等学校五十年記念誌編集委員会編：瑞穂高等学校五十年　記念誌、p83－85、瑞穂高等学校、1990
3) 水野時二、林　薫一、岩崎公弥監修：なごやの町名、p387、名古屋市計画局、1992
4) 水野時二監修:瑞穂区誌 - 区制施行 50 周年記念 - 、p246、瑞穂区制施行 50 周年記念事業実行委員会・名古屋市瑞穂区役所、1994
5) 吉村龍雄編：熱田神宮略記　p27-29、熱田神宮宮庁、1939
6) 藤沢彰：日本建築学会計画系論文報告集、第 385 号、p113-121、1988
7) 熱田神宮昭和造営誌、p84-99、熱田神宮宮庁、1966
8) 池田長三郎編：熱田風土記（上巻)、p10-21、久知会、1980
9) 熱田神宮宮庁編纂:熱田神宮史料、地誌編、p309、熱田神宮宮庁、2015
10) 金田一春彦著：ことばの歳時記、p94、新潮社、1973
11) 熱田神宮宮庁編纂：熱田神宮史料、地誌編、p291-294、熱田神宮宮庁、2015
12) 日下英之著：熱田　歴史散歩、p75-78、風媒社、1999 年 4 月 2 日発行
13) 熱田神宮昭和造営誌、p2-3、熱田神宮宮庁、1966
14) 吉村龍雄編：熱田神宮略記、p3、熱田神宮宮庁、1939
15) 熱田神宮は日本武尊（やまとたけるのみこと）と深い関係がある。日本武尊は天皇の命により東国の平定に向かうことになり、その途中伊勢神宮にて御姨（おんおば）倭姫命（やまとひめのみこと）に暇乞いし、その折に草薙剣を授かった。日本武尊は相模国（書紀では駿河国）で、国造（くにのみやつこ）（書紀では賊）の策略で、野で焼き殺されそうになるが、授かった剣で草を薙ぎ払い難を逃れた。東国を平定し、尾張に戻った日本武尊は、今度は伊吹山に荒ぶる神の退治に出かける。しかしこの時、日本武尊は尾張の国造の娘で彼の妃となった宮簀媛命（みやすひめのみこと）のもとに草薙剣を預けて出征した。山の神との戦いの後、日本武尊は熱田に戻ろうとしたが、途中、伊勢の国の能褒野（のぼの）で亡くなってしまう（倉野憲司、武田裕吉校注：古事記祝詞、日本古典文学大系 1、p211-225、岩波書店、1984)。宮簀媛命は尾張氏が葬儀の場所としていた熱田に社地を定め、剣（草薙剣）を奉斎鎮守したのが熱田神宮の始まりと言われる（熱田神宮宮庁編纂：尾張国熱田太神宮縁起、熱田神宮史料、縁起由緒編、p1-12、熱田神宮宮庁、2002)。熱田神宮に祀られる神は主祭神の天照大神（あまてらすおおみかみ)、草薙剣に縁のある健速素戔嗚命（たけはやすさのおのみこと)、日本武尊、宮簀媛命、宮簀媛命の兄で日本武尊の東征に副将軍として加わった建稲種命（たけいなだねのみこと）である。
16) 尾張は大和政権の東国進出の基地的存在であったことや、尾張氏が朝廷との外戚関係を築いて来ていたことなど、尾張氏と中央政権との繋がりには強いものがあった（日下英之著：熱田　歴史散歩、p41-45、風媒社、1999)。
17) 川崎庸之著：天武天皇、岩波新書、p83-131、岩波書店、1973
18) 神宮宮庁編纂:尾張国熱田太神宮縁起、熱田神宮史料、縁起由緒編、p1-12、熱田神宮宮庁、2002
19) 川崎庸之著：天武天皇、岩波新書、p152-159、岩波書店、1973
20) 水野時二監修：瑞穂区誌－区制施行 50 周年記念－、口絵（高田村絵地図および大喜村絵地図)、瑞穂区制施行 50 周年記念事業実行委員会・名古屋市瑞穂

区役所、1994
21)　井沢元彦他監修：ナゴヤ歴史探検、p16、名古屋市教育委員会、2018 年 5 月 20 日発行
22)　瑞穂短期大学四十年史編集委員会編:瑞穂短期大学四十年史、p268-269、瑞穂短期大学、1993